

第92号

1984年7月25日

内容

足の文化記号論.....1~2
 第128回大学共同セミナー.....2~5
 大学セミナー・ハウスの記号論.....5
 私の大学論.....5
 法人ニュース.....6~7
 二つの委員会, 新陣容なる.....7
 事業部だより.....8
 利用状況.....8~10
 わたしたちの合宿.....9
 告知板.....10

セミナー・ハウス

SEMINAR HOUSE NEWS

発行
 財団法人 大学セミナー・ハウス
 <所在地>
 東京都八王子市下柚木(〒192-03)
 電話 0426-76-8511~3
 振替口座 東京 5-74590番
 編集
 大学セミナー・ハウス
 企画室
 編集人 中川秀森
 発行人 吉川孔敏
 製作 中央公論事業出版

（一）

今日の記号学は閉じてしまいか、開いてしまいか、非常に中途半端な状態にあります。開かれた記号学にしておくためには、それを超えていこうとする試みを含めて、今回のセミナーのように様々な角度から考えることが必要でしょう。

記号学とは何か、記号学は何処へいくのかというところがわからなくなっている人も多いだろうかと思いますが、私の独断で言えば、記号学は各人の学問領域を少し違った方向から捉え直す手がかりを提供してくれます。

さて、これまでもいろいろな人が身体の問題を取り上げていますが、文化人類学では、文化を理解するための発見的モデルとして多くの人々によって論じられています。たとえば、有名な西アフリカのルドゴン族の文化に見られるように、大地が人間の身体として、さらに身体の各部分が家の各部分に対応させられ、それが最終的に全宇宙を反映しているものとしてイメージされています。ここでは身体を日々の欲望を満足させるための単なる器官としてではなく、弾力性のあるイメージで捉えています。

ところで、身体を世界あるいは社会に関する術語と重ね合わせてみると、人類学者メアリ・ダグラスもいうように社会的表象と身体的表象が相互に乗り入れている文化が多いことがわかります。たとえば、下半身を汚ないものとイメージすれば、そこに下半身のメタファーが成立し、社会的イメージもそこから構成される。また逆に

社会のイメージを分析していくと身体に対するイメージがわかってくる。記号論的に言えば、「身体イメージ」は具体的な言葉である「身体表現」は様々なコードを通して様々のメッセージを送り出している。だから、身体表現に対する身体イメージの関係は、「意味するもの」(シニフィアン)に対する「意味されるもの」(シニフィエ)の関係とみることができま

では、身体について使われている言葉をたよりに、身体に対する人間のイメージがどのような分極化を遂げているかを見てみましょう。日本語では「足」はネガティブ

第128回大学共同セミナー全体講義から

足の文化記号論



下半身のメタファー

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授
 山口昌男

ブな表現に、「手」はポジティブな表現に結びつく場合が多い。日常の生活感覚でも身体をイメージするとき、上(二頭)をポジティブに、下(二足)をネガティブに考える傾向があります。さらに右と左という二極も文化のルート・メタファーになっている。私が調査したナイジェリアのジュン族では右手は男の手、左手は女の手として捉えられている。各々の文化で上と下、右と左のどの軸が強調されるかの違いはあるが、大体下に対しては上が、左に対しては右がポジティブで、秩序的なものを象徴していることが多い。

そういうわけで、日本文化でも西欧文化でも、大体手は足に比べると有利な地位を与えられていますが、それは何故でしょうか。手は足よりもはるかに器用で指示機能が高く、言葉の代用機能を果たしているからでしょう。手が頭とか心とか、知性的・理性的なもの結びつけられるのに対して、足はその反対方向つまり自覚したくない部分に結びつけられています。足を取った表現の中には、あげ足を取る、足かせ、足切り、足手まとい、足踏みなどネガティブな表現が目立つのはそのためです。

最近では、相撲の本来もつていた身体感覚は薄れていますが、日本文化を考えると足の鍵が潜んでいます。相撲の土俵には四本の柱があつて、東と西が強調される。ある村では、毎年祭の時に東西に分かれて相撲を行ない、翌年の農作の予想をしますが、これによっても相撲が日本の農耕文化に欠かすことのできないコスモジカルな遊戯であることがわかります。また、相撲は天空と大地のコミュニケーションを媒介します。横綱の土俵入りのさいに四股を踏みますが、それは「へんばい(反閉)」といって、大地を踏み固めることによって地の悪しき精霊を鎮める民俗芸能の演技の延長として、大地の「氣」を吸収しながら地中に籠っている力をコントロールするためだといわれています。また歌舞伎でも荒事(あらごと)といえ、大体足で舞台を踏み固める所作をしますが、それも大地との関係を強固にする働きをしている。つまり、足は指示機能も弱く、情報量も少ないが、分節化されたものを統合する能力が手よりも大きいといえます。

映画を例に考えてみましょう。喜劇俳優のキートンは顔の表情を殺すことによって、全身を顔にしてしまう。チャップリンは演技の重心を上半身に、とりわけ顔や目の表情に置いているので、メロドラマ的な感情表現は巧みですが、人間心理の表層の情感を組織することができすぎない。これに対してキートンは、感情や思考を

（次ページ5段めへつづく）

第128回大学共同セミナー

主題「ことばと身ぶりの記号学」

期日 84年5月25・27日

△全体講義▽

足の文化記号論——下半身のメ
タフナー——

東京外国語大学教授 山口昌男氏
△ゲスト▽ 作家 井上ひさし氏
△演習指導・講義▽

立教大学教授 前田 愛氏
国学院大学教授 佐藤信夫氏
東京大学助教授 池上嘉彦氏
(運営委員)

東京外国語大学助手 中沢新一氏

京都大学助手 浅田 彰氏

△参加学生▽140名(内女子59名)

早大(13)、慶大(12)、筑波大、津

田塾大(各9)、東大(8)、立大、津

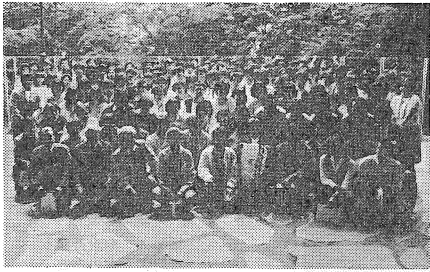
中大(各7)、お茶の水女子大(6)、

明大(5)、ICU、日本女子大

(各4)、東工大、横浜国大、高崎

経済大、学習院大(各3)、東外

大、東京学芸大、一橋大、都留文



宴と縁……セミナーを終えて
——野外劇場

科大、青学大、成城大、東京女子
大、東京理科大、東洋大、二松学
舎、日大、法大、武蔵大、武蔵野
美術大、明学大(各2)、信州大、
大阪大、都立大、国際商科大、独
協大、大妻女子大、成蹊大、聖心
女子大、桐朋学園大、産能大(各
1)、その他(4)、合計40校

◇ 二〇世紀前半以来の学問は、対
象を限定し、対象を分析する方法
を定めて、その分野に有効に働く
学術用語を設定することによって
進められてきたが、いまやこうし
た学問研究のスタイルが破壊を来
たしはじめていることは誰の目にも
明らかだ。学問の危機の真の導
因が、学問そのものに内在してい
ることを鋭く告発し、知のパラダ
イムの変革を要求する記号論運動
を様々の角度から考えることが今
回のセミナーの主旨である。

「記号論セミナー」の企画は、
共同セミナー委員会でも懸案のテ
ーマとして長く議論の俎上に載せ
られていた。今回このように待望
のセミナーが実現できたのは、共
同セミナー委員就任早々、企画・
運営をお引受け下さった池上嘉彦
氏、多忙なスケジュールのなか駆け
つけて下さった山口昌男・前田
愛・佐藤信夫・中沢新一・浅田彰
の五氏、それからゲストの井上ひ
さし氏らの多大なる尽力によるも
のでここに改めて感謝の意を表し
たい。

セミナーは募集開始以来、出版
界はじめ大学以外の各方面にも波
紋を投げかけ、応募者は予想にも違
わず殺到し、文学、哲学、経済
学・社会学、医学、理学・工学、
演劇・音楽などあらゆる分野から
二二〇名を超える申込みがあつた。
施設の収容能力、セミナーの
適正な運営などの制約から、機械
的に八〇名ほどの申込者をお断わ
りし、最終的に総勢一四〇名で実
施された。

セミナーは文字通り、中心と周
縁を無化するような「スキゾ」的
状況のなかで展開され、事後のま
とめや意味づけの作業を拒絶する
かのようだった。セミナーの詳細
は、セミナー・ハウス企画室編集
で発行する出版物によって報告す
る予定である。したがって本紙で
は、各指導教授の発言の一部と参
加者の声を紹介するにとどめた
い。



屋一
つエ論
みニ号
*
あんめ記
前田 愛

これはたかが「あんみつ屋」のメ
ニューじゃないか。ここから天
下国家を論ずるとは実にナンセン
スだ、とおっしゃるかもしれない
ん。しかし、こうした風俗の表層
に実は意外にひとつの時代の何か
が浮き上がってくる。そういうわ
れを分析することで、われわれ
はこれまで見えなかったものが見
えるようになってくる。これが記
号論によって開発された、今まで
の学問とは違う新しいアプローチ
の仕方だ。……

一つの記号体系のコードを考え
ることと同時に、こういう記号体
系がどういう具合にでき上がって
くるのか、その過程を記号論は視
野におさめる必要がある。……こ
とばというのは、確かにわれわれ
の周りにある世界を組織したり、
秩序立てたりする。ところが、私
によって秩序立てられた、あるい
は組織された世界は、逆に、こと
ばに対してつねに抵抗する。世界
とことばの間に緊張が起る。人
間の身体はこの世界とことばの緊
張そのものだといふことができ
る。……



“ずポ
ト”の
意味
*
佐藤 信夫

人々は長い間、「はじめに前提
がある」から結論が出る、と思い
込んでいたが、それはほんでもな
い間違いで、本当は「結論が先に
あり」前提をいつも探している。
結論が前提を探す、その探し場所
がトポスだ。……人間の言語とい
うのは、必然的な網目(コード化
された記号体系)の中を伝わって
いくものではなく、この中を伝わ
っていくうちにどうしても歪んで
しまふものである。その歪みは普
通の言語学では処理しきれない問
題だ。……

すべてのトポス(議論の根拠・
鏝型)には表と裏がある。多量も
のはいいという同じ(II量のトポ
ス)とまったく同じかたじけなく
のもの、ユニークなものはいいと
いうこと(II質のトポス)が表裏
になっていて、決して意味がきち
んと定義されることなく、意味は

(前ページよりつづく)
足のリズムによって表現してい
る。足の動きはリズム喚起力が大
きいので、観客の心をより深い層
から揺さぶります。

この両者の対照的な演劇技術は
様々の領域にも拡げていくことが
できる。西欧では顔による表現の
分節化が進んだのに対して、アジ
アの演劇では仮面を使うことによ
って顔の表情が無化されるため、
身体の潜在的な表現力を開発して
きています。今日西欧でも、日常
生活という分節化された世界を超
えた、より大きな統一体を表現す
るときには顔よりも足を中心に演
劇を構成するほうがより効果的
だ、ということになっています。

記号論的に身体を考える場合、
それを単なる指示機能から見てい
くのではなく、身体を超えた拡が
りの中で、つまり身体を介して家
を、家を介して都市を、都市を介
して世界を見るところという拡がり
の中で考えることによって開かれた記
号論が展開できるでしょう。われ
われは、身体を閉じたものと考え
るクセが身につけていますので、
まずこの身体イメージを解体して
別の次元で組み立てることが必要
なのです。こうした試みの中で記
号論は、各々の分野の人々にとっ
て有効なアプローチになってくる
と思われまふ。その意味で記号論
はこれからも独立の学問体系とし
てではなく、あくまでも人間をよ
り大きな拡がりの中で考えるため
の仲立ちをする、可塑性のある学
問として大いにその真価を発揮し
続けていくことでしょう。

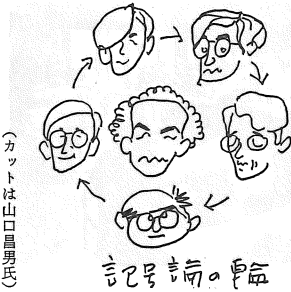
歪んだ空間の中で「ずれ」ながら
伝わっていく。……

ディスクールが組み立てられて
いく段階で様々な歪みが作用し、
そしてそのディスクールの歪み方
をいわば記述するものがトビカの
システムであった、といえる。と
すれば、自分自身の内部にある意
味空間の歪みの傾向を整理して、
自分なりにメタ・ディスクールと
してのトビカを組み立ててみるの
も面白いのではないかと……



スト号
リック記
ユイテ
ヒテし論 池上 嘉彦

言語をいわばモデルとして、言
語以外の様々の文化活動が言語か
ら派生している、という図式を考
えることができる。……そういう
モデル化体系であるところの言語
の営みや構造にならって建築や神
話など言語に似た世界が出てく
る。……一見まったく、バラバラ
な分野の中から統一的なものを見
出していくような営みとして、記
号論的な発想というのはかなり役
立っている。これは学問というほ
ど体系化されていないから、方法



(カットは山口昌男氏)

論というほどのものではない。英
語の heuristic という語に相当す
るものとして記号論を捉えれば、
何か面白いものが出てくるのでは
ないか。……ただそれはい一つの体
系的なものに結びついているわけ
では必ずしもないので、一見する
と、いかにも楽しく、軽やかに思
えたりするかもしれない。……

だからある意味で、記号論は非
常に表面的類似性に注目してい
て、専門家からみるとまるで遊ん
でいるようだ、だからいかにも軽
いもので、戯れの学問じゃないか
という発想も出てくるかもしれない
い。しかし、案外これまでに気づ
いていなかったようなことがいろ
いろと明るみに出てくる、という
ことも否定できない。そういう意
味で、どの程度これまでの細分化
した学問体系を組み替えられる
か、それを判断するにはもう少し
時間がかかるだろう。……



才超
カを
序図式
秩スえ
* 彰
浅田

ベイトソンは、何か分節構造が
あってそこからこぼれ落ちるよう
な未定型なものが、噴出すること
によって狂気が発生するというこ
とではなくて、分節構造自身が自
らの上に折り重なってくるような
ところでヒダができ、そこが分裂
病の発生因になるという議論をし
ているが、この点は注目に値す
る。……

ダブル・バインド状況というの
は、一方で悲惨な症例を生み出す
が、その症例をいわばチャンスと
して用いることによって通常の平

セミナーの企画と 実施を終えて

東京大学助教授 池上 嘉彦

「熱いままざしの注がれるとこ
ろ」などと言われるかと思うと、
一方では「記号論を超えて」とか
「もはやポスト・記号論の時代」な
どということがささやかれる—
こうといった雰囲気の中で、共同セ
ミナー委員になって初めて言いつ
けられた仕事が、山口昌男氏を中
心に記号論関係のセミナーを計
画、実行するというものであっ
た。そのために山口氏とお目にか
かったのは、もう一年以上も前の
ことであった。そして講師とし
て、山口・前田、佐藤の三氏と
私、それにもっと若い人も入れて
おくのもよいだろうというもこと
で、中沢、浅田の両氏に加わって
いただくことが決まった。

その後、ほぼ一年の間に、思い
がけないことが起こった——いわ
板な分節構造ではない世界と触れ
合うことができる。それはいつて
みれば、日常的な分節化された体
系から自己をズラしていくチャン
スにならっている。……

資本主義は常に自己を解体して
は組み替えていくプロセスである
が、変革のカオスの能力をそれと
対置させても、それによって資本
主義のもつ一定の秩序を揺がすこ
とははならない。カオスのなまも
がたちどころにパツカ化され商品
流通に乗ってしまう。……
「砂漠」という形象で言いたか
ったことは、秩序の等価物として

ゆる「浅田・中沢ブーム」であ
る。そして、セミナーが実際に開
かれる時点では、「われわれのほ
うがさしみの「つま」になってし
まった」と、山口氏は満足げに述
懐したものであった。

募集予定の一〇〇名に対し、学
部学生、大学院学生、社会人、合
わせて二二〇名を超える応募があ
った。応募者の専攻は神学からコ
ンピュータ・サイエンスまで、芸
術関係の諸部門をも含めていた。
そあらゆる分野にわたっていた。
応募理由として記されたものは、
すべて、記号論なるものを自分の
眼で、頭で確かめてみたいとい
う熱意に溢れ、とても銚衡の手段と
して使えなかった。結局、一、二
年生の人たちには申し訳ないが辞
退してもらおうということ、とし
て一方では宿舍を遣り繰りするとい
うことで、一四〇名の人たちに参
加してもらおうということになっ
た。

企画担当者としての私の意図
は、まず最初に記号論的な見方の
ドロドロの閉じた沼地のような混
沌ではなく、いわば秩序自身が自
分に折り重なってくるような、エ
クスターナルな場所をイメージ化
するためだった。そこではあたか
もことばの分節構造が溶けてしま
うような、何か情性態内にある混
沌といったもので非常に能産性の
高い状態である。星の世界に対
する夜の世界というように対し
て閉じた形象の中に押し込められ
まうのではなく、もっとオープン
な形で秩序の未来イメージを語る
ためにたまたま「砂漠」と表現し
た。……

諸相をさまざまな角度から提示し
ておき、その上で若い二人の講師
にそれを見事に「超えて」いただ
こうというものであった。しか
し、若い二人は賢明にもこの意
図を察してか、「超える」とか「超
えない」とかということとは関係
ない次元で問題を深く掘りさげて
下さり、「超えたか、超えなかつ
たか」は各人の判断に委ねるとい
う、これまた極めて賢明な提示の
仕方をとって下さった。そして、
ゲストの井上ひさし氏も、自らの
体験に基づく「ことばと身ぶりの
記号学」を興味深く語られて、記
号論の問題の身近かさを参加者一
同に強く印象づけて下さった。

参加者がそれぞれの日常的な生
活の場を離れ、八王子の丘の上の
セミナー・ハウスで過ごした三日間
は、一つの「通過儀礼」的な出来
事にたとえることができるかも知
れない。なぜなら、その後では、
参加者にとっては「世界が……何
か違ったものに見えて」きている
はずであるからである。



との
スト
カ対話
* 新一
中沢

無限とかパラドックスを孕んだ
理論で世界を捉えると、体系の外
部に作り出される闇の部分とかカ
オスの部分かというの残らなくな
る。僕たちは大脳や自然のなかで
起こっていることを直接的に捉え
ることを否定してきた。ことばや
概念というもので人間は、外の世
界との間に媒介をつくって、それ
を仲立ちにして自然の「怪物性」



記号論を超えて……浅田彰氏

い。だけでも何が違うかといったら、ユートピアとかパラドックスを容認するとか、怪物的なものといったことやったら対話できるか、といったことを考えることだろう。僕たちは本当は大脳や自然というものすごい怪物状態に包まれているが、それをたまたま見えないうようにしているシステムがいっぱいある。それを突き抜けていくような可能性がもしあるとしたら、その時人間は、これまでとは違ったレベルで記号論をこなしていることになるだろう。……



ピを来
ト間出
一時る *
ユア忘事 井上ひさし

というものを見えないようにしてつき合っていた。あるいは大脳の構造を言語のダイナミックな構造の中で、非常にラフなかたちでシミュレーションすることによって、今度はその言語構造を使い、外の現実を組み立てる。これも大脳のリゾーム状態をある意味で見えなくしている。抑圧し、情報の削ぎ落しをやる、運動性の制止を行なっている。……

現在のポスト構造主義といわれている潮流は、そんなに新しい思想ではない。これは昔からあった考え方で、大脳や自然と直接的に純粹状態で対話しようとする。ある意味でポスト構造主義は、大脳の大飛躍をしている。自然と直接的に対話できるようなテクニクは何かということ、大脳の中にユートピアを実現すること。それはドゥルーズのいう分裂病状態（スキゾフレニー）かもしれない。……要するに、僕は記号論を超えない。超えるとか超えないとかということじゃないのかもしれない。

芝居における役者の身ぶりあるいは演技というのは、肉体的な制約があることばや考えほど新しい情報にはない。誤解を恐れずにいえば、役者の身ぶりというのは非常に古い。いまお客さんは新しい情報に疲れている。たとえ幽霊の身ぶりというのは、どんなに新しい身ぶりを発明してもだめなんです。やっぱり腰を落とす、足はなるべく見せない、手はいつも袂におき、体を揺らす。そういう幽霊のもっている古い動きが、われわれ日本人の遺伝子の中に吸い込まれているような感じで入っています。古い気持ちのいい情報をたくさん使ってまずお客さんと一緒になったところで、僕が曲解した新しい情報なんかを付け加えていくと、お客さんもう実に機敏に、貪欲にその情報を消化して生きるものになって、舞台で笑う

と、お客さんも笑うようになります。……

意外に世の中というのは、それINSだ、VANだといろんなことを言いますけれども、そう簡単に新しい情報に引きずり廻されてたまるか、という僕の非常に保守的な部分が叫んでいるわけですけども、ことばも肉体もどんなに世の中が変わったからといって新しくなれるもんじゃありません。しかし、頭の中では何か新しくないか置いて行かれるんじゃないか、という錯覚がある、新しさを追いかけているうちに基本的な古さというのを忘れてしまい、自分で自分がわからなくなってくる。それが芝居小屋では、古さと新しさが幸せにも共存できるんですね。……

僕のユートピアというのは、本あるいは芝居です。ある集まりなどで、そういう意図があるかたつてもかわらず、何となく話はずんで楽しく時間の経つのも忘れてしまおうということがよくあります。そういうふうなユートピアというのは時間としてあるのではなく、芝居小屋にいて、たまたまそれがいい芝居で全員が一つの生きものになって、舞台の喜びを喜びとして、悲しみを悲しみとして共に息づいたとき「えっ、もうこんな時間になつていっている」というように、時間を忘れるような出来事というのが僕のユートピアなんです。……

記号学セミナー病にかかって

東海大講師 中村 桃子

人はこれを余韻と呼ぶのだから

か。私の頭の中では、「マロンクリムあんみつ」で出来た「けん玉」がぐるぐる回りながら、「SVO」と叫びたいのに、「トボス」と口走ってしまい、「モノ」であることを辞めて「コト」の形相を呈し、さらには絶え間ない運動を続ける「言語の種」となって、「葎原検校」のごとき暗黒の世界を「スキゾフレニック」に走り続け、その動きが大地と一体となってリズムと響いて「足」のように、ドクドクと響いているのである。私は、この「カオス」と化した私自身という「異人」に恐れおのき、「エントロピーの増大」を見つめることしかできないのか。ああ、私から「文化の中心」にどっかと腰を落ち着け、「秩序」づけられた「コード」に従って安楽に暮らしていた日々を取り去ってしまったセミナーとは、一体何だったのだろうか。

思えば、「構造」にあきあきして、一時の「祭り」に首を突っ込もうと、かつての千人同心ごときに八王子を目指した私たち。そこには「自然」の中にもかわらず「透明」な「言語」のように整然とした「スケジュール」が私たちを持っていた。「スケジュール」の「文法」に従順な私たちが、講堂と宿舍と食堂を「反復」した三日間、どのような「差異」が起ころうというのか。私たちの「記号表現」には何の「メタファー」も予定されておらず、「レトリック」の余地などまったくなく、ただあった。「ステープ・ゴート」役の先生方を血祭りにあげて、「フェスタ」が終われば、うつぶ

しかし今は、「構造」が懐しい、「秩序」がふるさつだ、「コード」はどうしているだろうと、ホームシックに言ってみても始まらない。どうやら私たちは、「記号学」の「ダブル・バインド」を経過して、「リゾーム」として、「周縁」に位置してしまつたようだ。今後、諸先生方にならって、「両義性」のスターとなるか、井上ひさし氏を夢見て「道化」に徹するか、あるいは、「器官なき身体」と化して、「軽いフットワーク」を誇示するか。いずれにしろ、私たちの「知」を心地よく刺激し続ける、この病気の感染を喜んでいない参加者はいないだろう。

林の中の楽園

記号論のアンシエヌマンを踊る 桐朋学園大学音楽科 渡辺恵美子

記号論は身が軽く、足が速い。羽がはえたように、喫茶店のメニューから身体論に至るまで、およそあらゆる領域を飛びかき、不思議な詩作の営みの秘密をすらすらと解き明かし、ある時は、おどろおどろしい人間の意識の起源や、精神分裂病者の病理を前に、立ちすくむ。

記号論を語られる諸先生の弁舌はさわやか、何やら華やいだ空気が見受けられる。それはまるでみどりの林の中、七人の先生の織りなす軽やかなディヴェルティスマンを聴いているような、楽しい知的遊戯への誘いのようなのだ。

あのように軽く楽しく記号論をあやつるには、私には準備が足りない。しかし印象から推してみると、例外的に原罪の重荷をまぬがれた不思議な少年が、裸でいつま

でも楽園の中を走りまわっているような、そんな感じを受ける。知恵の木の実はあまりにも魅惑的で、それを食べることを職業とする選ばれた人々は羨ましく、セミナーに参加する喜びも、しばしそのような人々にあやかる喜びであろう。参加者とのあつと驚くような出会いもあって、あの三日間は学生でいられることは本当に素晴らしいと思わせてくれた。

セミナーが終わって満ち足りた

私の大学論

参加学生のアンケートから

何かを期待するとつまらない。諦めると楽しくなるように思う。

(東京理科・建築・四年)

金がかかる 退屈、怠惰、旧態依然、動脈硬化……でもやはり好きなところです。祝祭空間だと思います。ここでは何でもできるけど、何をしても擬似イベントになっってしまう。(早稲田・東洋文化・四年)

大学はありませぬ、ただ、時間と空間が戦略のためにあるだけです。(慶応・経済・三年)

「知」が「痴」へ移行する場。文化の閉塞状況を端的に示すもの。自閉症の子供たちのむれ。受験勉強の果てに待つ最後の審判。(お茶の水女子・哲学・M1)

喜びを忘れないうちに、記号論を心の中で反芻してみる。赤ん坊が何を欲しがって泣いているかを聴き分ける母親は記号論を応用しないだろう。身体論的解釈で頭をさじがらめにされた踊り手は、毎日稽古を繰り返しているうち、もしかして精神錯乱を起こすかもしれない。作曲家がピアノに向かつてある音型を選び採る瞬間、彼は音を生んだのであって、例えばその増六度音程は記号ではなく倫理

いくら遊んでも誰もおこらないし、いくら勉強しても誰もほめてくれないところ。(東京理科・数学・三年)

いつの時代もそうだったでしょうけれども、いろいろな必要と各人各様の関心と動機があって、それぞれやり方で大学に關与している。そういう状況も悪くないと思います。(学習院・英文学・D1)

大学の体系的講義や演習から期待するものではありません。むしろ学生たちが自分の興味に従って考えをめぐらす場として考えています。(横浜国立・建築・四年)

僕らは、もうすでに大学に学問があるとは思っていない世代であり、自分でどんどん「知」を拡大していくことに興味があるので発生するのは、これからどんどん、大学の必要性がうすれていくことでしょう。(早稲田・文・三年)

興味をもてる授業が少なく、自由モノを言う機会も少ない。ま

である。贖いへの参与を課された殉教者の孤独な苦悩と、最後の瞬間、決して遅れることなく天から注ぎ込まれる聖霊の焰による法悦は、霊性の記号論と呼ばれるものだろうか。

記号論は思索と分析の有益な手がかりである。それは固着した自明な関係を溶かし去り、アクトバティックな手際の良さで、ものの見事に視界の転換をはかる。第一級の先生方の指導で記号論のアン

た、それほどそれを望んでいる訳でもなく、物足りなさを感じながら、半ばあきらめている。しかしその中で、一つでも好きな先生の授業があれば、それでいいのではないかと思う。(津田塾・英文・四年)

生産人口が通過してゆく場であると同時に、モータリウムを自ら志願する人間が、主題関心を発見する場であると思うので、管理や規制がなくなればなくなるほど良いだろう。(ICU・社会科学・四年)

学問は依然として不在だ。知識集約型産業機構の内に埋没している。学生の問題意識を對象化する場を保証し、それを促す形で講義をしてほしい。(学習院・経営・三年)

硬直化した制度の中で、大学自体は「うめき声」を上げていると思うのですが、個々の学生はその中でナルシスティックに、自己同一的な小集団を志向しているように思います。「スラシながら交通か、というところだと思えます。

(筑波・人間学類・三年)

シエヌマンを踊るわれわれは、そうしてそこからどこへ行ったら良いのか、私はもう少し考えてみた

大学セミナー

ハウスの記号論 前田 愛

今朝、散歩しているときに大学セミナー・ハウスを記号論的に解説してみたくなった。建築の設計者は故吉阪隆正さんですが、セミナー・ハウス全体がいわば「身体メタファー」をコードにしてうまくつくられていることがわかる。たとえば、宿舎、セミナー室、講堂、本館と、人間の集まりが一つではなくいくつものレベルに機能的に分かれている。それから建物には曲線が多く、直線がほとんどない。このセミナー・ハウスの建築群では、自然の中にどのように建物の曲線をなじませるか、ということがポイントになっている。

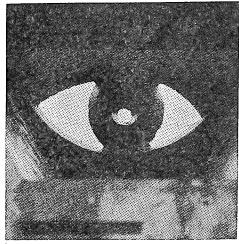
七つの葉のついた木のマークは、セミナー・ハウスの建物全体のシンボルだ。丘の上の一番高い所にある模型をした本館と中腹にある七つの宿舎群が、七枚の葉をつけた一本の木のメタファーによって表わされている。

宿舎から講堂へは、細い坂道を登って来なければならない。その間に体のしなやかさを取り戻し、講堂ではリラックスして講義を聞くことができる。講義が終れば、今度は坂道を降りて宿舎に戻る。降りる行為は体の緊張を解放してくれるので、そのまま休息するこ

とができる。逆三角形をした本館は一種の塔だが、上昇よりもむしろ楔のように深く地中に突き刺さることによって、大地の「氣」を受け取る人間の足のような役割をしている。普通の塔は、監視し、支配するものとしてあるが、本館はそういう塔ではない。それを証明するものとして、本館の側面に穿(うが)ってある大きな目玉があるが、これはセミナー・ハウス全体の一つの秘密の場所になっている。一体この目玉は何を表わしているのだろう。

いるは坂から本館へ向かう小道があるが、われわれはセミナー・ハウスにやってくると、まず最初にこの目玉に出会う。そして、別れを告げる時にはこの目玉に見送られる。このように、この目玉はわれわれを迎え、送る「まなざし」である。

大学のキャンパスは、ベンサム「パナプティコン」と呼ばれる牢獄の仕掛のように、一方的に見る者と一方的に見られるものとに分割された管理と支配の空間構造をもっている。これに対して、セミナー・ハウスは、この目玉が象徴しているように、それとまったく違った原理で成り立っているのだ。(文責・編集者)



ハウスの表衆く目玉> 本館東側の壁面

法人ニュース

◎第57回理事会

第38回評議員会

84年5月24日／銀行倶楽部

〔出席者〕

△理事 中川秀恭、楠川絢一、村山松雄、三宅彰、崎田直次、吉川孔敏

△監事 鈴木幸寿

△評議員 川原栄峰、井出源四郎、安藤良雄、鈴木隆雄、田中未来、箕輪圓、鶴沢昌和(代理木下法也) 委任状による者 理事一五名、評議員七四名 (敬称略)

理事会・評議員会は、中川理事長が議長となり議事に入る。吉川専務理事より議案につき逐次提案説明があり、若干の質疑応答のち、各案件を承認可決した。

▽評議員人事案について

学長交代等により、杏林学園長松田進勇、淑徳大学長飯田朝の両氏の新任。山本郁夫、永野重雄の両氏の退任。

なお、6月9日付をもって任期満了となるその他の評議員については全員を再任。

▽役員人事案について

(1)同じく6月9日付をもって任期満了となる理事・監事の全員を再任。

(2)この中で、茅誠司、飯田宗一郎の両理事については、創立以来のご功績をたたえて、とくにその

再任を議題として取り上げ、両氏の再任を決議した。

(3)執行部人事については、理事長兼館長の中川秀恭氏の再任。専務理事吉川孔敏氏の再任。常務理事では東京大学総長平野龍一、法政大学総長青木宗也両氏の新任。村井資長、楠川絢一、松田武彦、三宅彰、鈴木皇、崎田直次の諸氏の再任。

▽協力会員校の加入について

淑徳大学の加入。

▽準協力会員校の脱退について

実践女子短期大学の脱退。

▽昭和58年度事業報告案について

昭和58年度決算案について 事業収入は若干の増収により、諸経費増や補助金減額をある程度カバーできた。なお、具体的には本紙前号に掲載の「教育プログラムの白書」「業務白書」および別掲の「収支計算書」に大略記すとおりである。

監事からは「58年度の会計および業務とも適正に処理されており、とくに問題はない」との監査報告がなされた。

▽開館20周年記念事業募金について

募金目標額を五億円として「試験研究法人等であることの証明書」を文部省へ引き続き申請することを確認した。

●運営委員会

第1回 84年4月16日／当ハウス
第2回 84年5月18日／大隈会館

昭和58年度経常部収支計算書 (58.4.1~59.3.31)

1. 収支計算の部

| 収入の部 | | 支出の部 | |
|-----------|-------------|-------------------|-------------|
| 科目 | 金額(円) | 科目 | 金額(円) |
| 基本財産運用収入 | 245,103 | 人件費 | 130,792,145 |
| 事業収入 | 164,431,816 | 法人諸費 | 1,865,737 |
| 宿舍収入 | 125,445,662 | 事務費 | 20,931,179 |
| 施設収入 | 27,841,795 | 土地建物費 | 24,814,773 |
| 食堂収入 | 11,144,359 | 事業費 | 67,665,897 |
| 施設改修協力金収入 | 9,592,500 | 一般事業費 | 19,787,110 |
| 協力会員校会費収入 | 57,050,000 | 学生指導セミナー | 10,192,176 |
| 補助金等収入 | 14,117,000 | 普通セミナー | 34,130,058 |
| 寄付金収入 | 482,345 | 国際プログラム | 3,556,553 |
| セミナー会費収入 | 3,244,210 | 固定資産取得支出 | 7,188,230 |
| 雑収入 | 9,869,503 | 未払金返済支出 | 2,104,662 |
| 繰入金収入 | 6,767,729 | 学生指導セミナー 繰入金支出 | 3,315,729 |
| 積立預金取崩収入 | 935,000 | 災害復旧費 | 1,730,500 |
| 前期繰越収支差額 | 16,525,465 | 支出合計 | 260,408,852 |
| 収入合計 | 283,260,671 | 次期繰越収支差額 | 22,851,819 |

2. 正味財産増減計算の部

| 増加の部 | | 減少の部 | |
|----------|-------------|----------|-------------|
| 科目 | 金額(円) | 科目 | 金額(円) |
| 資産増加額 | 12,888,230 | 資産減少額 | 22,932,823 |
| 負債減少額 | 3,039,662 | 減少額合計 | 22,932,823 |
| 前期繰越増減差額 | 467,442,945 | 次期繰越増減差額 | 460,438,014 |
| 増加額合計 | 483,370,837 | | |

昭和59年度経常部収支予算書 (59.4.1~60.3.31)

| 収入の部 | | 支出の部 | |
|-----------|-------------|---------------|-------------|
| 科目 | 金額(円) | 科目 | 金額(円) |
| 基本財産運用収入 | 350,000 | 人件費 | 136,854,000 |
| 事業収入 | 157,090,000 | 法人諸費 | 2,268,000 |
| 宿舍収入 | 120,966,000 | 事務費 | 18,192,000 |
| 施設収入 | 25,216,000 | 土地建物費 | 22,207,000 |
| 食堂収入 | 10,908,000 | 事業費 | 68,996,000 |
| 施設改修協力金収入 | 9,430,000 | 一般事業費 | 20,431,000 |
| 協力会員校会費収入 | 56,900,000 | 学生指導セミナー | 11,093,000 |
| 補助金等収入 | 13,898,000 | 普通セミナー | 33,641,000 |
| 学徒援護会 | 12,073,000 | 国際プログラム | 3,831,000 |
| 日本国際教育協会 | 1,825,000 | 固定資産取得支出 | 7,000,000 |
| 寄付金収入 | 500,000 | 未払金返済支出 | 1,000,000 |
| セミナー会費収入 | 3,560,000 | 学生指導 繰入金支出 | 4,020,000 |
| 雑収入 | 8,888,000 | 繰入金準備 | 2,000,000 |
| 千人会繰入金収入 | 3,901,000 | | |
| 経常部繰入金収入 | 4,020,000 | | |
| 積立預金取崩収入 | 4,000,000 | | |
| 計 | 262,537,000 | 計 | 262,537,000 |
| 前期繰越収支差額 | 22,852,000 | 次期繰越収支差額 | 22,852,000 |
| 合計 | 285,389,000 | 合計 | 285,389,000 |

●寄付金報告

84年2~5月

- △教育プログラム資金 13,000円 第127回大学共同セミナー
- △一般寄付金 3,600円 参加者一同殿 放送教育開発センター 教授 阿部美哉殿
- 10,000円 第128回大学共同セミナー 指導教授 山口昌男殿
- 3,800円 第128回大学共同セミナー 参加者一同殿
- 10,000円 慶応義塾大学
- 10,000円 西川研究会殿
- 3,000円 文京女子短期大学殿
- 3,000円 文京女子短期大学
- 3,000円 文部英語文学科 フレ

二つの委員会、

新陣容でスタート

本年度は、任期(二年)満了に伴い、国際プログラム委員会、大

改選期を迎えた。新委員の委嘱を進め、別記のように新しい委員会

昭和59年度

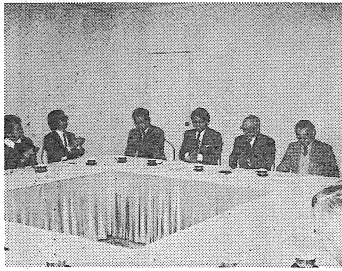
第1回国際

プログラム委員会

84年4月20日

東京ガーデンパレス

〔出席者〕 広野良吉、三輪公忠、阿部美哉、菊地靖、熊田禎宣、庄



正副委員長の選出。右より三輪、中川、広野、山澤の諸氏

第1回は新任六名を含む一四名

の委員に、ハウス側から中川館長、吉川専務理事、企画室スタ

委員長の自己紹介が行なわれた後、正副委員長の選出に移った。

次に、昨年度に開催された第10回国際学生セミナーの実施報告と

の企画についての協議に移った。

「発展と平和のモデルを求めて」

が踏襲され、サブ・テーマには、留学生の多い理工系の学生に焦点

加藤委員より国際文化会館や国際交流基金、日本学術振興会など

の機関と連絡を密にし、会場を適宜都内に移しながら共催の形で実施することを考えてはどうかという提案がなされた。

なお、企画を具体化するに際しては、全体の委員会に諮らなくては、全体の委員会に諮らなくては

できることと、各委員が積極的に情報や意見を提供することを確認して開会した。

昭和59・60年度国際プログラム

委員(就任順、敬称略、○印は新任)

△委員長

△副委員長

△委員

阿部美哉

菊地 靖

熊田禎宣

岡村 豊

浜西栄一

長

庄野克房

杉山二郎

中村英夫

渡辺利夫

マリオン・W・スタイル

佐々波楊子

立川 明

長谷川三千子

渡辺昭夫

勝谷祐一

加藤幹雄

昭和59年度第1回大学

教員懇談会企画委員会

84年5月11日

青学会館

〔出席者〕 井早康正、小池生夫、

根岸愛子、堀部政男、蠟山道雄、浅井邦二、岩波一寛、絹川正吉、佐藤保、速水佑次郎、宮腰賢(敬称略)

議事はまず、中川館長の開会挨拶につづいて正副委員長の改選人事に入り、委員長には前期に引きつづき井早康正氏を、副委員長には新たに小池生夫、岩波一寛両氏を選出した。

つづいて、前年度に実施された第20回懇談会の報告が吉川専務によって行なわれ、蠟山、根岸両委員からは、運営委員としての感想と運営に関して、種々の提案がなされた。

次に、今回の中心議題である第21回懇談会の企画についての協議に入った。企画室が準備した資料に基づき、活発な意見交換の後、「曲り角にきた大学」とくに低学年の教育をめぐって」がテーマ案として提出された。最終的なテーマや講師の人選など細部については、運営委員に委ねることとし、次の三氏を委員に委嘱した。

小池生夫(委員長)、絹川正吉、宮腰賢。

前年度で退任の旧委員を囲む会食には、大川信明、三宅彰、村田喜代治の三氏が出席された。これまでの労に感謝し、併せて新委員会の前途を祝して全員で乾杯した。

香原志勢 立教大学教授
田村光三 明治大学教授
徳末愛子 日本女子大学教授
根岸愛子 東京女子大学教授
堀部政男 一橋大学教授
水島義治 日本大学教授
蠟山道雄 早稲田大学教授

浅井邦二 早稲田大学教授
佐藤 保 お茶の水女子大学教授

絹川正吉 国際基督教大学教授
速水佑次郎 東京都立大学教授
宮腰 賢 東京学芸大学助教授
村上陽一郎 東京大学助教授

△委員長

△委員

岡嶋道夫 東京医科歯科大学教授

小池生夫 慶応義塾大学教授

岩波一寛 中央大学教授

△委員

コブシ一株 都立立川短期大学

サザンカー一株 新入生歓迎セミナー殿

都立立川短期大学

都立立川短期大学

都立立川短期大学

都立立川短期大学

都立立川短期大学

都立立川短期大学

都立立川短期大学

都立立川短期大学

都立立川短期大学

都立立川短期大学

都立立川短期大学

都立立川短期大学

都立立川短期大学

都立立川短期大学

都立立川短期大学

都立立川短期大学

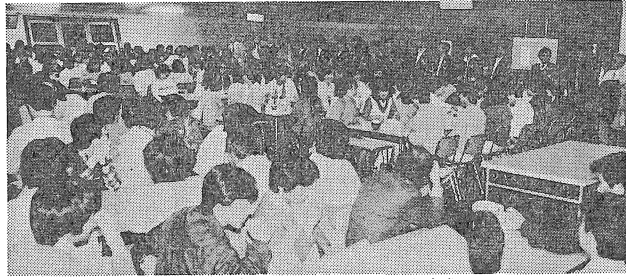
都立立川短期大学

都立立川短期大学

●事業部だより

84年4・5月
若葉のキャンパスから

陽春4・5両月は、本格的な新
入生オリエンテーションのシーズ
ン。今年も4月3日に第一陣を迎
え、以後、各大学の学部・学科・
クラス単位の新生合宿研修が、
ほとんど連日のように繰り広げら
れた。新緑の季節にふさわしく、
フレッシュマンの活気に溢れる時
期である。両月の利用状況は次の
とおりである。



新生グループを迎えて賑わう食堂に、タイ・タマサート
大訪日団(正面後方)も到着、満場の拍手で歓迎を受けた。

夕食時の交流

● 新生合宿、両月の話題から
今年も先陣は、在校生が入学前
の新生を歓迎する東京薬科大。
延べ四五八名は両月中最大の合宿
である。東海大(医)、杏林大(医)
(保健)の三学部は、今年も入学
式直後の開催。一六年度の日本女
子大(社会福祉)など、ハウスで
の開催が一〇年以上のオリエンテ
ーションが少なくない。慶大国際
センター主催の留学生オリエンテ

ーションは二年ぶり五回目。ハカ
国からの留学生が日本人学生・教
職員と交流を深めた(9頁写真)。
準会員校・産業能率短大(秘書
専攻)は初めてのオリエンテーシ
ョンを実施。東京都立川短大、
同商科短大、同工科短大の三校
は、準会員校加盟(本年4月)後
の初利用。この三短大の新生合
宿セミナーは、いずれも一年以
上の利用実績を持つ。中でも立川
短大は、70年以來連続の開催で、今
年で一五年度。ハウスでは、開催を
推奨された吉田幸弘教授は、以後
毎回新生に「この丘の施設と植
木」を自作のスライドで熱心に紹
介し続けてこられた。本号の「わ
たしたちの合宿」(9頁に別掲)
では、準会員校加盟を記念して、
吉田教授に同短大伝統の新生セ
ミナーを紹介いただいた。

● 新生を歓迎して
例年のように、大学の枠をこえ
て新生を暖かく迎える光景が見
られた。たとえば4月21日の週
末、夕食時の食堂(六グループ二
四九名)では、特に日本女子大
(社会福祉)と東京農工大(農業工
学)の新生グループが紹介さ
れ、秋山智久・明学大教授が歓迎
のメッセージを述べた。当夜は、
中大との国際交流親善試合で来
日、ハウスに三泊したタイのタマ
サート大サッカーチーム(団長の
ラニット副学長ら二五名)の一
行が到着、満場の拍手で歓迎を受
けた(上掲写真)。また、翌22日に

- 東京学芸大学助教 山田 有策
- 早稲田大学助教 村田 勝彦
- 慶応義塾大学助教 川合 隆男
- 慶応義塾大学助教 高橋潤二郎
- 法政大学助教 水谷 明
- 明治学院大講師 廣田 史男
- 杉野女子大短大教授 田村 皖司
- 石坂 巖
- 古川 哲
- 大谷登士雄
- 木村 久雄
- 明星大学講師 小堀 宏甫
- 早稲田大学助教 杉山 雅洋
- 早稲田大学助教 土方 正夫
- 青山学院大学助教 小林 保彦
- 青山学院大学助教 山田 晃
- 青山学院大学助教 中澤 進一
- 駒沢大学助教 石井 修二

昭和59年4・5月
新生オリエンテーション実施状況

| 大 学 名 | 参加者数 |
|-------------------|------------------|
| ● 4 月 | |
| 東京薬科大(新生合宿) | *229(一) |
| 東海大・医学部 | *159(17) |
| 産業能率短大・秘書専攻 | 169(7) |
| 工学院大・工業化学科 | 153(21) |
| 杏林大・医学部 | *114(10) |
| 東京学芸大・幼稚園教育 | 38(4) |
| 東京都立大・機械工学科 | 62(56) |
| 立教大・観光学科 | 142(6) |
| 杏林大・保健学部 | *121(5) |
| 東京農工大・農業工学科 | 32(6) |
| 日本女子大・社会福祉学科 | 109(10) |
| 慶応義塾大・国際センター(留学生) | 110(10) |
| 中央大・「心理学」会 | 62(一) |
| 中央大・教育学専攻 | 67(6) |
| 東京都立商科短大・商学科II部 | 79(14) |
| 学習院大・学生相談所 | 46(5) |
| ● 5 月 | |
| 東京都立大・数学科 | 75(10) |
| 東京都立川短大 | 115(24) |
| 武蔵工業大・電子通信工学科 | 175(15) |
| 東京都立商科短大・商学科 | 269(21) |
| 東京都立工科短大・機械工学科 | 40(8) |
| 東京都立工科短大・精密機械工学科 | 36(8) |
| 東京学芸大・理科教育教室 | 18(2) |
| 東京学芸大・化学教室 | 43(4) |
| 東京学芸大・物理学教室 | 41(4) |
| 東京学芸大・生物学教室 | 53(5) |
| 東京電機大・電子工学科 | 114(2) |
| 文京女子短大・英語英文学科 | 252(12) |
| 文京女子短大・英語英文学科 | 246(8) |
| 津田塾大・英文学科 | 268(20) |
| 東京学芸大・数学教育学科 | 185(10) |
| 電気通信大・通信工学科 | 64(4) |
| 津田塾大・数学科 | 105(12) |
| 東京都立大・物理学科 | 58(6) |
| 日本女子大・家政経済学科 | 108(10) |
| 文教大学女子短大部・英文学科 | 175(12) |
| 職業訓練大 | 241(45) |
| 計 37 グループ | 4,373人 (419人) |

(注) 専修学校・各種学校を除く。参加者数の()内は内
数で教職員。*は2泊,他は1泊。実施順。

●利用状況

** 同月2回利用
** 同月3回利用
日帰り利用を除く

開催された遠来荘
での茶会では、慶
大国際センターの
オリエンテーショ
ンで来日の各国の
留学生など新生入
生たち(四グループ
六三名)が、また
5月27日には都立
大(物理)のフレッ
ッシュマンたち(三
グループ五〇名)
が、地元奉仕者か
らの接待を受け
た。

◆わたしたちの合宿◆
第15回新入生歓迎
セミナーを終えて

東京都立川短期大学教授
吉田 幸弘

私をはじめて大学セミナー・ハウスを利用したのは一九六七年一月でした。この施設が大変気に入りました。翌々年と三年連続で毎年一月に学生を連れてここ多摩の丘でセミナーを開きました。そして三年目の時、本館ロビーのテレビで見たのが東大安田講堂の攻防でした。その頃は全国的にいわゆる学園紛争が多発していました。

私の勤務する学校も例外ではありませんでした。そして少しでも学園を正常化するために、新入生と教員が泊り込みでディスカッションをしようということになり、私がこの施設を推薦し一九七〇年六月に新入生歓迎セミナーが一日二日で実現したのでした。

翌年からは五月の連休あけに行なうこととなり、新入生全員約八〇名を連れ、教員側も学長以下原則として全員、事務局も学生と接触の多い教務課職員が加わり、文字通り全学あげての毎年度始めの大行事となっています。

一日目は講堂で学長のお話が始まり、校歌の練習をしたり、私がスライドを用いてこの施設の紹介をしたりし、夜は各セミナー室に分かれておそくまで討論し、これは翌日も続けられますが、最後は再び講堂に集まって終了するというのが毎年のおおよそのパターンになっています。

終了後のアンケートでも、ほとんどの学生が「よかった。また来たい」と述べ、学生の発議で再度この丘でセミナーを開いたことも何度かありました。教員側もこの施設が気に入っているようで、会場を変えようという話はまったく出ず、毎年当然のことのようにここを訪れ、今年も第15回の新入生歓迎セミナーを終わったところです。

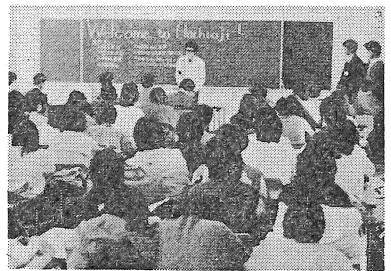
学校行事としてのセミナーは昼食で終わるので、午後私は希望者と一緒にして行きます。昨年はこの散策に参加した学生が自然探究部を作り、秋に再びハウスを訪れました。今、私どもの学園はまったく平和で、一五年前がウソのよう。今年度から準会員校に加えていただき、記念に本校のシンボルであるコブシの木をハウス内に植樹しました。私どもとしては二本目のコブシです。

私自身が主催するセミナーも、ここ多摩の丘で一〇回を超えました。今後とも本学は大学セミナー・ハウスのお世話になることでしょう。



記念植樹——搬入れする興良学長と中川館長(左)(第1宿舍群中庭)

- 慶応義塾大学教授 山田 辰雄
- 東京薬科大学新入生歓迎キャンパス 西野 萬里
- 明治大学教授 和田 英夫
- 明治大学教授 飯田 喜介
- 中央大学助教授 北 彰
- 明治大学教授 寺田 由永
- 駒沢大学助教授 阿部 弘
- 千葉大学助教授 野沢 敏治
- 駒沢大学講師 福田 耕治
- 東海大学医学部新入生研修会 水野 節夫
- 法政大学助教授 水野 節夫
- 日本大学芸術学部アナウンス・サークル・スタンバイ 浦田 賢治
- 早稲田大学教授 深沢 実
- 青山学院大学教授 中村 達也
- 千葉大学教授 石山 伍夫
- 明治大学教授 肥後 和夫
- 成蹊大学教授 杉浦 智紹
- 駒沢大学教授 肥後 和夫
- 産業能率短期大学秘書専攻新入生オリエンテーション
- 明治大学明治記念館有志 工學院大学工業化学科新入生オリエンテーション
- 杏林大学医学部新入生宿泊セミナー
- 東京学芸大学幼稚園教育学科オリエンテーション
- 東京都立大学機械工学科新入生オリエンテーション
- 成蹊大学教授 宇野 重昭
- 東京薬科大学教授 *** 坪井 實
- 東京大学教授 小出昭一郎
- 中央大学講師 吉田 宣之
- 立教大学観光学科新入生オリエンテーション
- 上智大学スペイン演劇研究会
- 杏林大学保健学部フレッッシュ・マ
- 早稲田大学図書館長期計画委員会
- 東京農工大学農薬工学科新入生合宿オリエンテーション 横田 澄司
- 明治大学教授 日本女子大学社会学部福祉学科新入生オリエンテーション 秋山 智久
- 明治学院大学教授 大久保治男
- 駒沢大学教授 慶応義塾国際センター(留学生オリエンテーション・キャンプ) 中央大学「心理学」会新入生歓迎セミナー 油井大三郎
- 中央大学教育学専攻新入生オリエンテーション 奥山 典生
- 一橋大学助教授 高柳 先男
- 東京都立大学教授 小林 豊
- 中央大学経済学部教員懇談会 立教大学講師 原 巧
- 青山学院大学教授 小林 豊
- 日本大学教授 赤松 泰輔
- 工学院大学教授 赤松 泰輔
- 東京都立商科短期大学商学科II部新入生オリエンテーション
- 早稲田大学法研・若手の会 学習院大学学生相談所フレッッシュマン・キャンプ 松野 憲二
- 千葉商科大学REIT研究会 芝浦工業大学電子計算機研究会 東京農科大学ラ式蹴球同好会 明星大学教授 高橋 宏
- 国際商科大学助教授 高橋 宏
- 東洋大学教授 今富 正巳
- 専修大学教授 中山 雅博
- 相模女子大学教授 卷 正平
- 東京キリスト教学園 堀野 定雄
- 神奈川大学助教授 堀野 定雄
- 横浜市立大学教授 柳下 勇
- 東京コンピュータ学院新入生オリエンテーション* 麻島 昭一
- タマサート大学サッカーチーム
- 桜美林大学体育文化団体連合会
- 専修大学教授 麻島 昭一
- 土木学会水理委員会
- すみれ幼稚園
- 国立西埼玉中央病院附属看護学校
- 日本基督教会神学校
- 日本キリスト教団小岩教会
- 日本キリスト改革派南浦和教会
- 十字架の言社高橋聖書集会
- サンウエーブ工業 エリート
- 興亜火災海上保険
- 市光工業
- 日本興業 ***
- 阿部興業 ***
- ゼブラ
- アスター精機
- システムズプランニング
- 日電アルバ*
- 沖電気工業
- そごう
- アイワールド*
- 小西六写真工業
- 京王百貨店
- 富士通興業 (個人利用)
- 東洋大学教授 堀 光男
- タイ・ジー不動産 米山 哲夫
- 三和建設*



慶大留学生オリエンテーション——新入生を歓迎する日本人学生委員長

日本トラベノール
5月

(91グループ、延五、二九二)

法政大学生協同組合

日本大学教授 菊池 敏夫

青山学院大青山キリスト教学生会

明治学院大学Y.M.C.A

中央大学考古学研究会

中央大学経済学会

東京都立大学数学科新入生ゼミ

日本大学芸術学部朗読研究会

上智大学劇団ソフィア・リトル・スクエア

東京電機大学I部S.F研究会

早稲田大学日常英語研究会

武蔵大学講師 増田 実

埼玉大学合気道部新入生歓迎合宿

明治大学雄弁部新入生歓迎合宿

日本大学教授 北野 弘久

杏林大学講師 永井 健晴

成城大学教授 東郷 克美

東京都立川短期大学新入生歓迎

セミナー

東京理科大学教授 富沢 稔

武蔵工業大学電子通信工学科新入

生歓迎セミナー

立教大学教授 三戸 公

予告

▼第120回大学共同セミナー

主題 男と女——性差の本質と

文化の意味——

期日 11月23・25日

△全体講義△

筑波大学臨床医学系教授

岩崎寛和氏

△ゲスト△ 作家 安岡章太郎氏

△演習指導△

(文化人類学)

筑波大学教授 綾部恒雄氏

国立民族学博物館教授 片倉もと子氏

東京都立商科短期大学商学科新入

生オリエンテーション

一橋大学教授 山澤 逸平

東京都立大学教授 坂元 忠芳

成蹊大学教授 朝倉 孝吉

芝浦工業大学教授 高橋 清

東海大学教授 師岡 孝次

東京都立工科短期大学機械工学科

新入生学外研修

東京都立工科短期大学精密機械工

学科新入生学外研修

東京学芸大学理科教育教室新入生

合宿研修

東京学芸大学化学教室新入生合宿

研修

東京学芸大学物理学教室新入生合

宿研修

東京学芸大学生物物理学教室新入生合

宿研修

電気通信大学教授 牛島 照夫

早稲田大学ローパス

早稲田大学教授 平沢 茂一

中央大学教授 佐藤 清

駒込大学助教授 谷敷 正光

立正大学教授 厚東 俣介

東京電機大学電子工学科新入生オ

リエンテーション

(文学)

東京大学助教授 亀井俊介氏

武蔵大学教授 杉田弘子氏

の諸氏。

△運営委員△

武蔵大学教授 杉田弘子氏

国際基督教大学教授 青柳清孝氏

▼第11回国際学生セミナー

主題 発展と平和のモデルを求め

て——科学技術と伝統社会——

期日 12月7・9日

東京都立商科短期大学商学科新入



告知板

グループ123

会の名称は第120回大学共同セミ
ナーに由来している。会の代表・
松原里香さんによれば、この名称
は「女性学」なんて差別用語じ
やないか? 女性の問題は男性の
問題でもあるはず! と、すった
もんだの挙句、無難に落ちつい
た。
昨年5月、「平和・婦人・学問」
をテーマに一泊の共同セミナーが
開催されてから一年。Bセクショ

ンの参加者が中心となり、婦人問
題の勉強会が発足して半年。毎
月、第三日曜日に集まって、各自
の専門分野からの発表が行なわれ
ている。
例えば、女性史、比較文化、心
理学、生理学、売春問題、福祉な
ど。秋には分科会形式をとり、他
の活動を加えよう、という声もあ
る。
メンバーは、大学も専門も多種
多様。中には筑波から通り熱心な
参加者もあり、男性が若干、多
目。早稲田周辺から代々木付近を
集合場所としていた。「膝を交え
てみたい人、一石を投じたい人、
多くの考えにふれたい人、待って
います」と呼びかけている。
連絡先 03-634-5051 松原里香

東京カナダドライ
全国青色申告会総連合
積水ハウス
日本フードサービスチェーン協会
ジェイ・エム・アール東京
企業開発センター
〔個人利用〕
玉川大学助教授 甲斐 隆
三井金属鉱業 横山 昌寛
中部電力長野支店
小諸電報電話局
中央タクシー 渡辺 賢良
日本トラベノール 矢部 広重
●編集後記
三日間に亘る「知」の祭典は終
った。60年代の学生運動の中に燃
え上ったエネルギーが、時移っ
て、紛れもなく「知」の営為へと
向かっている様を眼前にしたの
が、この第120回大学共同セミナー
であった。参加者の綴った「私の
大学論」から、読者は何を読み取
られるのであろうか。
7月7日、大手町の永楽倶楽部
で「吉阪隆正集の出版を記念する
会」が催され、編集者も出席して
U研究室や早大・吉阪研のなつか
しい面々に再会した。故吉阪先生
の建案は、「不連続統一体(Discon-
tinuous Unity)」という吉阪哲学
の主要概念に集約される、といわ
れる。ライフワークとなった大学
セミナー・ハウスの建築群は、そ
こから導き出される個と集団のダイ
ナミックスを、余すところなく
表現している。
先のセミナーで、前田愛先生は
本紙掲載のごとくハウスを記号論
的に解説されたが、閉じていない
空間こそ、ハウスの本領であり、
正しく今日の記号論の世界につな
がるものなのだろう。(能)

東京大学田中昭二研究室
東京女子短期大学英語英文学科新
入生オリエンテーション*
津田塾大学英文学科フレッシュユマ
ン・キャンパス
東京学芸大学教育学科新入生
合宿研修
慶応義塾大学助教授 森 康彦
青山学院大学青山子ども会
武蔵工業大学教職課程
国際基督教大学スチューデント・
セミナー
電気通信大学通信工学科新入生合
宿研修
明治大学助教授 長尾 史郎
津田塾大学数学科フレッシュユマ
ン・キャンパス
東京都立大学物理学科新入生オリ
エンテーション
日本女子大学家政経済学科一年生
オリエンテーション
中央大学講師 中村 和夫

共立女子第二高等学校生徒会
桜美林大学助教授 相馬 順一
専修大学教授 萩原 実
阿佐ヶ谷美術専門学校
和光大学教授 坂本 清
文教大学女子短期大学英文学科フ
レッシュユマン・セミナー
職業訓練大学校新入生合宿
第120回大学共同セミナー
東京ローア・バプテスト集会所
久遠キリスト教会青年会
トミー植松語学センター
東京ドイック文化センター
建築設備耐久研究会*
第一弘報社
東芝
川鉄商事
日本生産性本部
フランズヘッド
京王百貨店
スパーアルプス
阿部興業**